



梅雨入り後、肌寒い日が続いていましたが、次第に蒸し暑さが増してきました。心塞ぐニュースばかりが続き洗濯物は乾かない…ついため息が出てしまいます。そんな中、14年前に亡くなったそうれっしゃ合唱団の団員、近田洋一さんを偲ぶ機会があり、心がじんわりと温まって、平和への思いを新たにすることができました。

50年前の1972年5月15日、沖縄は日本に復帰しましたが、県民が切に望む米軍基地の整理縮小や経済政策は何ら果たされませんでした。琉球新報の記者だった近田さんは「変わらぬ基地 続く苦悩 いま祖国に帰る」とトップ見出しをつけ、黙殺された民意を代弁しました。

この返還に当たっては、島民の要望が完全に無視されただけではなく、米軍による基地の自由使用（出撃）を認めるという、とんでもない密約が交わされていたわけですが、その事実を知らなくとも、記者の慧眼は沖縄の厳しい前途を見抜いていたのです。

復帰50年目となる今年の5月15日、琉球新報はその一面に、近田さんが手がけた歴史的紙面と同じ構成で、「変わらぬ基地 続く苦悩 いま日本に問う」と掲げ、変わらない沖縄の現状を訴えました。



近田さんは、芸術的才能に恵まれ画家を志すほどでしたが、米軍統治下で人権を踏みにじられる沖縄の人々の苦悩を目の当たりにし、記者となる道を選びました。1959年6月に起きた宮森小学校への米軍戦闘機墜落事故では、児童12人を含む18人が死亡、210人が重軽傷を負いました。近田さんは、夢を絶たれた子どもたちの無念を背負い続ける決意を胸に、一旦絵筆を置き、ペン一本に全霊を注いで闘い続けました。一方で、コザに演劇集団を結成して自身も参加、沖縄の子どもたちには、高価でなかなか手にすることのできなかった日本の絵本を輸入して届けるなど、文化振興にも尽力しました。

その後、琉球新報東京支社への転勤などを経て埼玉新聞の記者となっても、常に弱者に寄り添う気骨あるジャーナリストとして、粘り強い取材活動続け、ルポタージュ『駅と車椅子』では、日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞。そうれっしゃについての温かい記事も、何度も書いてくれました。

プライベートでは、絵画や陶芸の製作に精力的に取り組む傍ら、2005年からは、ついにそうの団員となって練習にも欠かさず参加し、翌年の舞台にも立ちました。2度目の本番を間近に控えた2008年6月7日、近田さんは突然、3年前に看取った愛妻の元へと旅立ちました。まだ69歳でした。6月6日付、自身も歌うはずだった



近田さんが好きだった
月桃の花

コンサートの開催を報じる埼玉新聞のこの記事が絶筆となりました。「そうは子どもたちがいいんだよ」と目を細めていた近田さん、いつも全力で歌の練習を楽しんで、晴れ舞台に立つことを心待ちにしていた近田さん。貴方は、私たちの誇りです。

毎年、その死を惜しむ仲間たちが、この時期に咲く美しい南国の花に因んだ追悼の集い『月桃忌』を開いてきました。残念ながら今年でひと区切りとするそうですが、彼の人となり、生き様は、知る人たちの胸にいつまでも残り続けるでしょう。

